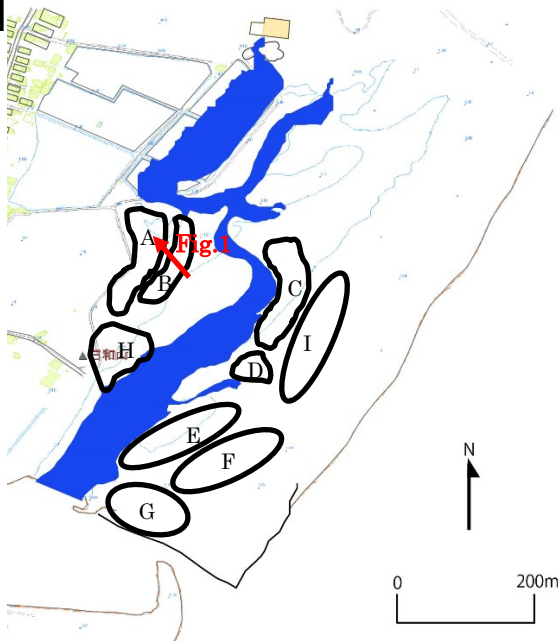


蒲生干潟の植物③



2020/06/12 調査エリア 2020年6月調査



Fig.1 エリアAを南東側から撮影



Fig.2 エリアEで撮影



Fig.3 エリアEで撮影



Fig.4 エリアFで撮影

調査日時：2020年6月12日（金）9:30～11:30，天気：晴れ

潟湖周辺の植生調査を継続した。エリアAを南東方面から見ると、人の背丈程の高さまで若いヨシが伸び、ヨシ原全体が青々と見えた(Fig.1)。エリアB, C, E, Hの潟湖にごく近いエリアではハマツナが5～10cm程の高さまで成長していた(Fig.2)。一ヶ月前は、エリアF, I, Gでハマエンドウが紫色の花を咲かせていたが、そのほとんどは枯れて、一部果実ができていたものも見られた(Fig.4)。そのハマエンドウの花に代わって、ハマヒルガオが花を咲かせていた。ハマエンドウが2～3m四方の狭いエリアに群生するのに対して、ハマヒルガオは乾燥したエリアに広く群生していた。ハマヒルガオは、エリアI, F, Gで見ることができた。

拡大



Fig.5 エリアIで撮影



Fig.6 エリアHで撮影



Fig.7 エリアFで撮影



Fig.8 エリアFで撮影

エリアE, Hのやや乾燥した2～3m四方のエリアに、シオクグが群生していた(Fig.6)。シオクグは、花の部分がコウボウシバによく似ているが、30cm以上高く伸びており、コウボウシバに比べ、狭い範囲に群生していた。エリアFでは、ハマボウフウが花を咲かせていた(Fig.7)。近づいて観察すると、花弁のすき間から黒色のやくをもったおしべが見える(Fig.8)。この花は雄性期の花である。この後、やくから花粉がすべて出ていくと、雌性期の花へと替わる。このようにして、ハマボウフウは自家受粉を避け、他の花の花粉を受け取ることで多様な遺伝子を受け継ぐ工夫をしている。

(丹野美紀)